

小学校教員養成課程における
「小学校英語教育法」への段階的学びを考える
— 苦手意識の克服と指導時の不安軽減をめざして —

西 崎 有多子

小学校教員養成課程における 「小学校英語教育法」への段階的学びを考える — 苦手意識の克服と指導時の不安軽減をめざして —

西 崎 有多子*

目次

1. はじめに
2. 本学における英語関連科目
3. 本学学生が抱える問題点
4. 教育学部における1年次英語科目改革
5. アクティブラーニングを取り入れた「かぐや姫」プロジェクト
6. 新課程に向けて
7. おわりに

1. はじめに

来年度（2018）から2年間にわたる次期学習指導要領の完全実施前の移行措置期間が始まる。小学校における英語教育においては、その後の次期学習指導要領に基づく新教科書への対応の必要性から、単なる移行措置ではなく、全面先行実施が必要不可欠とされている。しかし、全国的にその認識ならびに足並みは揃っておらず、本学周辺の教育委員会の電話調査に対する回答も分かれており、児童の今後に心配が残る状況となっている。

外国語活動が始まって以来、文科省が作成した教材は、『英語ノート 1』『英語ノート 2』、『Hi, friends! 1』『Hi, friends! 2』、研究開発校のための『Hi, friends! Plus』と更新されてきた。先月には、措置期間に使用するための新教材『We Can! 1』『We Can! 2』の暫定版が一部で公開された。教材の内容には一連の流れや共通点もあるが、数年ごとの変更は、現場にとって負担となっていることは否めない。

小学校教員養成課程における小学校英語関連科目においても、教材の変更に対応してきているが、今後の3・4年生対象の外国語活動に5・6年生対象の外国語科が加わる影響は多大であり、より深く、高度な内容が求められる。本稿では、限られた英語関連科目の中で、どのような対応ができるか、すべきかを模索しながらの実践について中間報告を交えてを述べていく。

* 愛知東邦大学教育学部

2. 本学における英語関連科目

本学における英語関連科目は、全学共通科目の外国語科目の中で英語を選択した場合は、1年次に以下の4科目（いずれも1単位）を選択必修科目として履修することになっている。

1年前期 「英語Ⅰ」または「英語基礎Ⅰ」と「英語オーラルコミュニケーションⅠ」

1年後期 「英語Ⅱ」または「英語基礎Ⅱ」と「英語オーラルコミュニケーションⅡ」

4単位が修得できれば、外国語科目の卒業要件は満たすこととなり、ほとんどの学生はこの時点で英語科目の履修を終了してしまう。2年次以降は、選択科目として「英語Ⅲ」（リーディング中心）、「英語Ⅳ」（ビジネス英語）があるが、英語力を高めたいと考える少数の学生しか履修しないのが現状となっている。教育学部では、上記の科目に加えて「小学校英語」（3年前期・2単位）と「小学校英語教育法」（3年後期・2単位）があるが、現在はいずれも選択科目であり履修しなくても卒業も免許取得も可能な状況にある。加えてこれらを履修しても、英語関連科目の総単位数は8単位にしかならず、将来小学校で英語を指導するに足る指導力獲得に対して、危機感を持たざるを得ない。

3. 本学学生が抱える問題点

総単位数や時間数の問題のみならず、本学の学生の中には高校までの英語授業時間数が極端に少ない、主に普通科以外の出身学生や、そもそも英語が苦手で出来る限り避けてきた学生がいる。そのような学生たちは、一般入試以外の入試方法で入学するケースも少なくなく、いわゆる高校での入試対策の英語を学ぶことなく、語彙も文法も忘れた状態から、大学での英語の授業を受けている。「英語オーラルコミュニケーション」の授業で、初めてネイティブスピーカーと話した学生もいる。教職課程を履修する学生の中には、将来自分が英語を教える立場に成り得ることを想定しているはずだが、不安はあるものの行動に移す学生が少ないことに対して、多方面からの適切な指導が必要となっている。

英語関連科目を増やすことで解決したいところだが、本学はキャップ制により、半期24単位が上限となっており、既に2年次までは、ほぼ全員が上限の単位数で履修登録を行っている。小学校教員養成課程は対象となる科目数が多いこともあり、現状では英語科目数を突出させることはほぼ不可能といえる。既存の英語科目を最大限に活用することにより克服する道を模索することがまず求められる。

4. 教育学部における1年次英語科目改革

2017年度入学生から、教育効果向上を目的に1年次の英語科目を学部別編成にし、各学部の教育目標に合わせた内容の教材を使用することとなった。それに伴い教育学部では、英語を選択した学生を2クラス編成とし、「英語ⅠC」または「英語基礎ⅠC」の内容を教育学部に合わせた、かつ3年次の「小学校英語」と「小学校英語教育法」を意識したものへ変更することにした。これにより、1年次より段階的に準備ができる体制となった。

幼稚園や小学校における英語教育に関連した英語に触れる内容とし、以下の3点を1年目の基本方針とした。

1. 英語（英語教育に関連する英語も含む）に慣れ親しみ、知識を増やしておく。
2. 小学校英語型の授業を自ら体験しておく。
3. 小学校英語だけでなく、幼稚園等で働く予定の学生にも役立つ内容にする。
4. 授業をモジュール化し、多面的な内容を90分間で体験する。

1に関しては、後日再度出会った時、以前聞いたことがある、学んだことがあるという安心感は、英語の苦手な学生にとって大きな意味を持つことになる。英語の学びの第一段階として興味を持つ機会とし、今までの学校英語にはなかった切り口で、英語の楽しさ面白さを感じさせるものとする。2については、授業法を学ぶ前に自ら授業でその方法を体験して形式に慣れておく。教えられたことのない方法を用いて人に教えることが難しいことは、想像に難くない。この体験により、より小学校英語に対するイメージを構築しておく。3については、本学には「初等教育コース（幼・小の免許取得を目指す）」と「幼児教育コース（保・幼の免許取得を目指す）」に学生が分かれているため、両方のコースの1年生にとって役立つものとし、小学校英語に偏らない内容とする。4でのモジュール化は、小学校英語で使われている短時間学習という意味でのモジュールではなく、部品（パーツ）としてのモジュールの意味で、多様な内容とするという意味である。

モジュールの内容は、語彙・会話、英語絵本、歌、ゲーム、紙芝居等を織り交ぜたものである。語彙・会話面は、主に保育英語に関する教科書を用いて幼稚園や小学校での日常場面の英語、書類上使用される英語、保護者との会話例、自己紹介、園内の説明、小学校英語教材の単語、クラスルームイングリッシュ、英語の諺等が含まれる。絵本については、代表的な絵本を教員が読み聞かせをし、読み聞かせのポイントや方法についても触れる。学生による読み聞かせも行なう。



写真1 使用した絵本の一部



写真2 学生による読み聞かせ

歌については、代表的な歌をCD、DVD、海外の英語教育サイトを含むインターネットで紹介し、皆で歌い動作をつけて実技も行う。指導上の留意点に加え、英語の歌の韻についても紹介し、学生自ら韻を意識し、見つけ出すことができるようにする。これにより、小学校英語教科化により指導内容に含まれる文字と音の関係への出発点にもなる。ゲームは、キーワードゲーム等を授

業の教科書の単語も含めて体験し、学生が先生役となってゲームの目的を意識した指導ができるようにする。紙芝居は、教科書にある英文のかぐや姫を基に、「かぐや姫プロジェクト」と称してアクティブラーニングを行う。

5. アクティブラーニングを取り入れた「かぐや姫」プロジェクト

「英語基礎 I」において使用した教科書『Happy English』本文にある、Bamboo Princessを題材とした。プロジェクトの手順は以下のとおりである。

1. 英文の音声を、教員による読み聞かせ、CDによるネイティブスピーカーによる音声の両方を聞く。(この時点で、最初はほとんど英語が聞き取れないことを認識させておく。)
2. 全体での音読練習を、教員によるゆっくりから始める発音練習、リピート練習、段階を経てCDのリピート練習等を行う。単語の発音に不安をなくしておく。
3. 日本語で、簡単に意味の確認をする。
4. 20ある英文に番号をつける。
5. 列によるグループ(各グループ6人程度)分けをし、英文の分担を決める。
6. 紙芝居の絵(20枚)をグループに割り当て描く。
7. 1番の英文から順に、同じ英文を担当する各グループのメンバーを前に集め、教員による発音練習を繰り返し行い、すべての学生が担当部分に対して自信を持って読める状態にする。同時にそれ以外のメンバーは、紙芝居の絵の作成または個別練習(暗記を含む)を行う。



写真3 紙芝居の一部

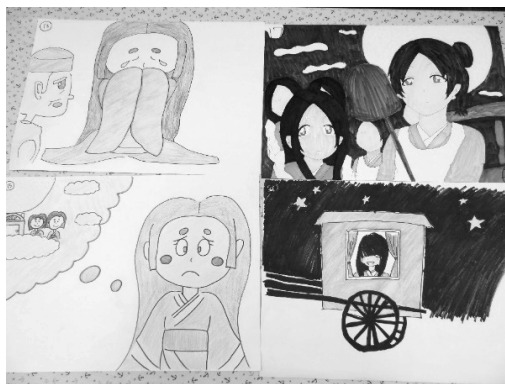


写真4 同左

8. 20番までの練習が終わったら、各グループで全体の読み合わせを行う。
9. 紙芝居を使いながら、各グループで発表の練習を行う。
10. グループ発表を行い、録画する。
11. 皆で録画を観て、感想と改善点を言い合う。
12. 各文(各紙芝居)のベスト?メンバーを選び、そのメンバーで上演する。
13. グループ内で、音読の教え合いを行い、一人ずつが20文全文を一人で読めるようにする。
14. 一人ずつ音読テストを研究室にて予約制で行う。

15. 授業でCDを聞きながら、慣れ親しんだ英文でシャドウイングの練習を行う。

16. アンケートの実施

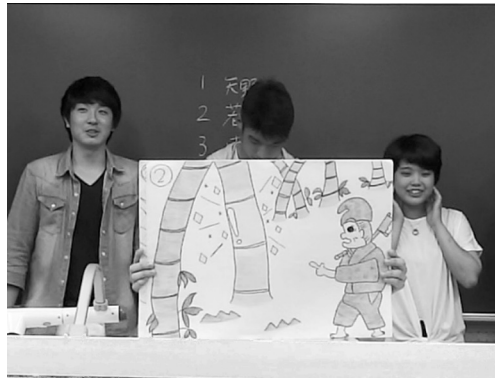


写真5 グループ発表の様子

かぐや姫プロジェクト全体の感想としてのアンケート（24名回答）の結果は、以下のとおりであった。

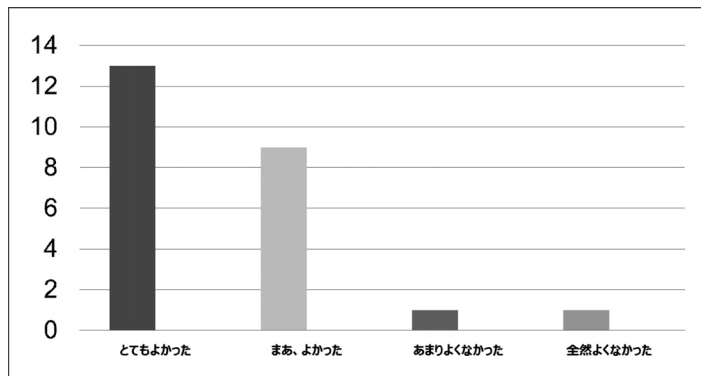


図1 プロジェクト全体への感想

それぞれの回答の理由については以下のような記述となっている。

「とてもよかった」理由 13人

- ・話を覚えるのによかった。
- ・みんなが暗記して音読できていたから。
- ・みんなと英語で会話する機会になったし、人前で英語をしゃべる経験になった。
- ・紙芝居でとても分かりやすく、物語を英語で話すことはとても新鮮でした。
- ・みんなと協力しあい、仲も深まった。
- ・楽しかった。
- ・紙芝居を作ることで英語の意味がよくわかってよかった。

- ・絵を描くのが楽しかったから。
- ・みんなで協力するのがよかった。
- ・交流できた。
- ・みんなで一つのことにとりくむのが小学生のころのようで楽しかった。
- ・とても有意義な時間だった。
- ・緊張したけど英語の発音とかよくわかるようになった。

「まあ、よかった」理由 9人

- ・発音がよかった。
- ・おもしろかった。
- ・創作的だと思ったから。
- ・かみしばいをみんなで作って、話を理解することができた。
- ・覚える意欲がわいた。
- ・日本の昔話を英語に訳すとまた違う感じで楽しかった。
- ・皆でやる楽しさと英語を理解すること、どちらもできたから。
- ・紙しばいをつかってやったので、何となく入っていた。

「あまり、よくなかった」理由 1人

- ・暗記するのが大変だった。

「全然、よくなかった」理由 1人

- ・あきらかにクラス全体に意欲を感じなかった。

全体についての感想以外に、いくつかの項目でのアンケートを行ったが、「とてもよかった」と「まあ、よかった」がほとんどを占めた。(以下の円グラフで右回りに「とてもよかった」「まあ、よかった」「あまりよくなかった」「全然よくなかった」を示す)

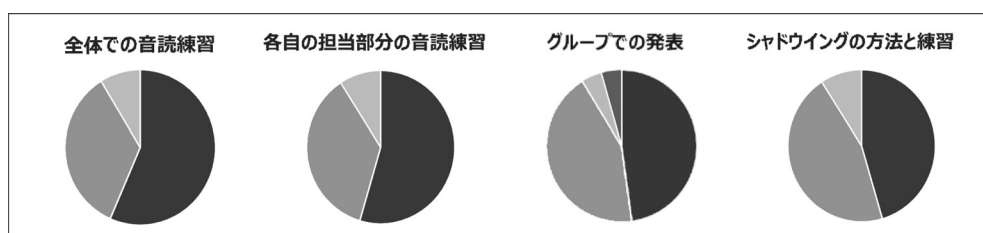


図2 プロジェクトについての項目別感想

このプロジェクトに関して特に留意した点は以下のとおりである。

- ・プロジェクト開始時の自分と終了時の自分の明らかな違い（成果）に学生自身で気付きがあるようにする。
- ・全員に個別指導を行い、担当の英文については、発音や読み方に自信が持てるまでにする。

- ・英語ができない、全く自信のない学生も同じように参加、教え合うことができるようにし、先生役を固定化させない協働学習へとつなぐ。
- ・グループのメンバーで協力して一つのことを達成し、仲間で完成させることの楽しさを感じ、仲間づくりの機会とする。今後の多くの実習等を仲間と乗り切ることに役立つ。
- ・学生が小学校英語のような授業を体験し、イメージを持って後の教育法の授業へつないでいけるようにする。
- ・練習等であまり重荷や苦しさを感じさせないようにし、結果として楽しかったと思えるものとする。
- ・グループとして完成させていだけでなく、同時に個人としてのそれぞれの英語力向上を意識できるようにし、今後の更なる向上へつなげる。

プロジェクト全体をとおして、最初は寡黙なクラスの雰囲気が大きく変化し、明るく活発な雰囲気になった。自分たちの発表の録画を観て盛り上がり、ベストメンバーでの発表は運動会の決勝リレーのように更に盛り上がるものとなった。またやりたいとの声が複数上がった。アンケートの結果から、このプロジェクトの意図がほぼ達成されたことが確認できた。

6. 新課程に向けて

英語関連科目に加えて、担当のゼミにおいても『Five Little Monkeys jumping on the bed』を題材として、グループ発表を行った。



写真 6



写真 7



写真 8



写真 9

題材が英語であることで、全体として余裕がない面も見られたが、これを出発点として今後の成長が楽しみに思える発表となった。

「小学校英語教育法」では模擬授業が中心となり、前提となる教材研究、教材開発、ティーム・ティーチング、評価等が授業内容になるが、いきなり具現化することは不可能である。いざ行おうとすると、指導案はどう書くのか？そのとおりに授業ができるのか？絵本はどれがお勧めなのか？読み聞かせの方法は？英語で授業をするということは？発音に自信がなくてはっきり声にできない？発音記号の読み方は？ゲームの種類・目的・有効な利用法は？等々、学生は多くの疑問と不安に直面し前に進めなくなってしまう。

1年次から、少しずつそれらの不安を解消すべく準備を進めていくが、中でも指導案は学生にとって難問となる。そのため、前段階の「小学校英語」の授業では、指導案というものに慣れておくことが肝要であり、文部科学省のウェブサイトに掲載されている指導案を書き写すところから始めている。写しながら、意味がわからない部分、授業のイメージが湧かない点等を言い合い、学生の質問に答える。指導案の一部をミニ模擬授業として行う。児童の動きを想像し、このとおり児童が動けるかを考える。例えば、名札を作る活動は、簡単に思う学生もいるが、いざやってみると具体的な問題がいくつも起こることがわかる。へボン式か訓令式か、名前の順番はどうするか等をはじめ、書きにくい名前の児童はいるかどうかまで事前に調べる必要があることにも気付くことになる。また、年間計画において、このレッスンはどういう意味を持つか、語彙等に事前に日頃から練習しておく等の配慮は必要か等、全体から考える視点も学んでおく。

語彙・発音面の不安をできるだけ取り除いておくことも必要である。どのような語彙を学ぶのかリストアップし、発音記号も書き添える。最初から、発音記号から発音を練習するのではなく、ある程度書きためて、同じ発音が別の単語にある時に、同じ発音記号で表示されていることを意識し、確認する段階を経て、発音記号を改めて学び確認する手順が学生には有効と思われる。出会ったことのない語彙の発音のしかたや、名詞の複数形も確認しておきたい。そうした細かな準備が不安を軽減し、自信につながることになる。

7. おわりに

問題が山積したまま、現在すべての小学校教員養成課程を持つ大学で、文部科学省から示されている「コア・カリキュラム」を基に、新課程のカリキュラム作成が急がれる状況にある。「小学校の新たな外国語教育における新教材年間指導計画例案イメージ」、『研修ガイドブック』、放送大学「小学校外国語教育教授基礎論」シラバス、具体的な方向が示された『We Can! 1』『We Can! 2』の暫定版ならびにその指導書等を中心的な資料として、学んでおくべき内容を把握した上で、本学の学生の実態に沿うカリキュラムを検討・構築しなければならない。学生たちが将来教育現場で自ら考え、指導していくことができる力をつけられるよう、出来る限りの指導が求められている。

《参考文献》

生田和也（2017）「英語指導力向上のためのアクティブラーニング型授業デザイン：小学校英語教科化に向けて」『鹿児島女子短期大学紀要』第52号、pp.33-44

土屋麻衣子（2015）『Happy English for Childcare』金星堂

文部科学省（2015）「アクティブ・ラーニングに関する議論」中央教育審議会資料

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/_icsFiles/afieldfile/2015/09/04/1361407_2_4.pdf#

文部科学省（2017）小学校の新たな外国語教育における補助教材の検証及び新教材の開発に関する検討委員会資料

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/123/index.htm

放送大学（2017）「小学校外国語教育教授基礎論」シラバス

http://www.ouj.ac.jp/hp/kamoku/H29/kyouyou/C/kiban_kiban/5140013.html

文部科学省（2017）『We Can! 1』『We Can! 2』暫定版ならびに指導書

本文中のアンケート結果、写真の使用について、学生の許可を得て使用しました。

受理日 平成29年10月2日